横穴墓に納められた素焼きの棺

赤田横穴墓群（奈良市西大寺赤田町一丁目）

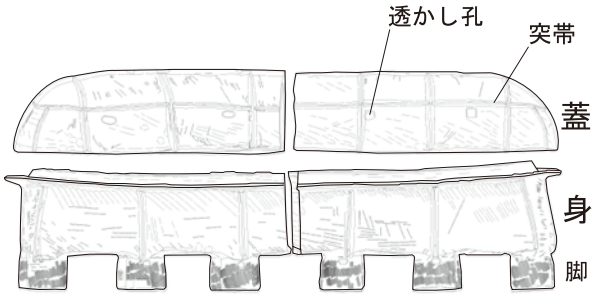
奈良盆地の北西部に面する丘陵では、６世紀の後半から７世紀の中頃にかけて、丘陵の斜面に横穴を掘削して遺体を埋葬する「横穴墓」がさかんにつくられます。遺体は、陶棺と呼ばれる素焼きの棺や木棺に納めて埋葬されています。

医療法人平和会吉田病院の敷地内にある赤田横穴墓群もその一つです。これまでに１～９号墓の発掘調査を行ったところ、２・６号墓を除く横穴墓の墓室内に土師質亀甲形陶棺が納められていました。

土師質亀甲形陶棺は赤い焼き上がりで、深く丸みを帯びた蓋と身からなり、身の底部に円筒形の複数の脚が付きます。蓋や身の外面は、格子状や山形に粘土紐の突帯を貼り付けて装飾しており、蓋に突起が付くものや透かし孔を穿つものもあります。なお「亀甲形」の名は、上からの見た目が亀の甲羅に似ていることによります。

この種類の陶棺は、近畿地方の中央部と岡山県の東部でよくみられます。蓋に突起の付くものは、大阪平野の東部と岡山県の東部でみられ、前者から後者に伝わるようです。蓋に透かし孔を穿つものは主に奈良盆地の北西部でみられます。

赤田横穴墓群の位置（1/30,000）



亀甲形陶棺の部分名称

５号墓の墓室と陶棺（南から）

＊棺の周囲に副葬品の土器がみられる

５号墓　奥棺

３号墓　陶棺

５号墓　前棺

７号墓　初葬時の陶棺

７号墓　追葬時の陶棺

平成22・23年度に発掘調査を実施した赤田横穴墓群の陶棺は、整理作業を進めてきましたが、このたび３・５・７号墓の陶棺の復元作業が完了しました。復元された陶棺からは、以下のことがわかりました。

１．陶棺のスタイルの移り変わり

６世紀後半の５号墓の陶棺２基は、いずれも長さ2.4m、幅0.7m、高さ1.2mで、蓋・身とも二つに分割されています。粘土紐の突帯で区切られた方形の区画が蓋で上下３段、身で２段みられます。脚は小口側からみて３列あります。

いっぽう７世紀中頃の７号墓の陶棺２基は、５号墓よりも小さくなります。墓室中央に納められた初葬時の陶棺は、長さ1.8m、幅0.6m、高さ0.8mで、蓋・身とも二つに分割されています。突帯で区切られた方形の区画は、蓋で上下２段、身で１段です。西隣に納められた追葬時の陶棺はさらに小さく、長さ1.2m、幅0.6m、高さ0.7mで、蓋は二つに分割されていますが、身は一体です。突帯による装飾はなく、簡素なつくりです。脚は小口側からみて２列です。

墓室は後に造られた方が小さくなりますが、陶棺も小さく簡素になることがわかります。

２．２色に彩色された陶棺

６世紀後半の３号墓の陶棺は、盗掘の際に大きく破壊されていました。全体の半分が復元できましたが、蓋で上下２段、身で１段の突帯で区切られた方形の区画の中が、赤と緑の顔料で交互に彩色されていることがわかりました。

こうした陶棺は、奈良県内では天理参考館所蔵品に次いで２例目で、珍しいものです。

発行　奈良市教育委員会　平成２６年７月